

ラオスの こども通信

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 五嶋みどりさんのカルテットの演奏に
聴き入る子どもたち ▶ p1
- はじめる・つながる・つくりだす [2010.12-2011.3]
ラオス発 ▶ p2 日本発 ▶ p3
- みんなでボランティア ▶ p4
- 勉強会「報告」▶ p4
- メコンのはとり「衣」▶ p4



51
冊
2011年4月発行

五嶋みどりさんの カルテットの演奏に 聴き入る子どもたち



みどりさん直伝で楽器体験中（ヴィエンチャン子どもセンター）



ルアンパбан県ティンソム小学校での演奏
©Photo: Shinobu Suzuki ミュージック・シェアリング提供

思いがけない質問

「どうして演奏しながら顔を揺らすの？」カルテットのみなさんに男の子が質問すると、五嶋さんは「サッカーをするとき、全身を使うでしょう。楽器も全身で弾くのですよ」と説明をしました。本物の演奏は子どもたちの心に深く響いたことでしょう。当会はラオス各地で児童館型施設の「子どもセンター」の支援を行い、そこでは伝統音楽、舞踊、コーラス、図画工作などの表現活動が行われています。今後、もっと音楽に親しめる場とし、表現活動をしている子にもそうでない子にも、感性をより豊かにする活動をしていきたいと考えています。



子どもたちからの質問も演奏に
(当会こども図書館)

本物の音楽を届けたい

世界で活躍するヴァイオリニストの五嶋みどりさん率いる弦楽カルテットが2010年12月にラオスを訪問。五嶋さんは音楽を通じた社会貢献として、若手演奏家とともにアジアの国々での国際交流を積極的に展開し、当会はヴィエンチャン、ルアンパバン小学校や中学校、子どもセンター、当会子ども図書館など7か所での演奏に協力しました。

「世界の子どもたちに本物の音楽を届けたい」という趣旨のもと、訪問先ではドヴォルザークをはじめ本格的な演奏が行われました。子どもたち、先生方は初めてのクラシック音楽にじっと聴き入り、また演奏家の真剣な眼差しに戸惑いの表情を浮かべる子どももいました。

演奏後は楽器の説明と子どもたちが楽器に触れ、弓を使って鳴らす体験も行われました。そして子どもは、お礼に歌や踊りなどを披露しました。

<日本での公演予定>

ラオスを訪れたカルテットがツアー報告コンサートを行います。お問い合わせの上、お出かけ下さい。

第5回 ICEP ラオス/日本
活動報告コンサート ～五嶋みどりと若き演奏家たち～

◆大阪公演

2011年6月3日(金)19:00開演 (18:30開場) ザ・フェニックスホール

◆東京公演

2011年6月6日(月)19:00開演 (18:30開場) 王子ホール
チケット:全席指定 3,000円(税込)発売日:4月4日(月)10:00～
詳細はミュージック・シェアリングHP
<http://www.musicsharing.jp/?p=180>

ラオス発

モデル図書館となって ラオス全国に発信を

ラオスのモデル図書館に1という意気込みで、2010年9月、住宅街のサンモーン村に当会事務所と併設の図書館を移転オープンして早半年が経ちました。毎週、約400～500人の子どもたちが来館します。3人の妹弟とやって来るジャイアン風の小学生のお兄ちゃん、学校帰りに毎日欠かさずお父さんに遇ってもらう鼻垂れ小学3年生、お年頃の中学生ボランティアたち…ラオスのことも図書館は今日も賑やかです。



禁止令出ても

お昼休みが終わってもラオスの子ども(ALC)図書館から戻って来ず学校の授業をさぼった生徒がいるとして、付近の小学校の校長先生はお昼休みにALC図書館に通うことを禁止しました。しかし、その小学校の子どもたちがたびたびお昼休みにやって来ます。「来ちゃダメって言われてもじゃないの?」と聞いてみると、「先生に内緒で来た」と言います。

1月は、学校を休んで1週間図書館に通って来た中学生がいました。学校の登校時間に図書館にやって来て、お昼休みの時間になると帰り、午後の登校時間になるとまたやって来て1日中本を読んでいる制服姿の女の子。「学校に行かなくていいの?なんで学校行かないの?」と聞いても口をつぐんだままです。

本が好きだからなのか居心地が良いから来ているのか、どちらでも良いし、どちらとも理由で来てくれるようになれば嬉しい限りです。

中学生ボランティアの活躍

また、図書館では10人ほどの中学生が貸出しや返却作業、図書整理のお手伝いをしてれています。壁にはそうしたボランティアの顔写真と名前を掲示しています。

その子たちがお寺の行事に参加したときのこと、私の知り合い「ALCの図書館に来ている子?」と聞かれ、「図書館のボランティアです」と答えています。子どもたちは役割を担っていることの自信と誇りを感じているようです。

ラオスの子どもたちにとって家の仕事をするのは日常のことである一方、学校に部活や委員会活動がありません。図書館ボランティアは社会性を養う機会となっているといえます。



©Daniel Hambury/Stella Pictures

貸出し人気ランキングから見えること

毎週600～800冊の本が貸出されています。貸出しカードの記録から人気ランキングをまとめたところ、1～4位が民謡の絵本でした。子どもたちは家族や先生にお話ししてもらって知っているお話しの本を好んでいるようです。

日本の支援者の方が送ってくださったラオス語訳を貼った日本の絵本を3冊借りようとした女の子に選んだ理由を尋ねたところ、「うーん、おもしろいかなと思って読んでみることにした」と、知らないお話に興味をもち始めた様子でした。

短編小説や伝記など色々なジャンルの本がありますが、マンガ(ラオス語版「ドラえもん」)を除き、ベスト10のすべてが絵本でした。図書館の常識には中学生もたくさんいますが、絵のない厚い本に手が伸びるよう、次なる働きかけが必要かもしれません。

作って、聴いて、感じる、多様な学び・遊び

12月はクラシック・コンサート(p1参照)を行い、さらに紙芝居作家のやべつりのりさんの工作教室を開きました。15人で種も切ったはずが、小学1年生から大学生まで約60人が集まり、混乱を極めながらも、皆それらしい手作りおもちゃを完成させていました。

ラオスの学校では図工や美術の授業はないに等しく、子ども図書館としては読書活動に留まらず、子どもたちの世界を豊かにする遊び・学びの機会を提供することをめざしています。



試行錯誤がスタッフに自信をもたらす

当会に読書推進活動をラオス全国の学校で展開していますが、絵本に初めて接する先生も多く、図書活動が不活発となる例もあり、「ラオス人に本好きはいない」と言い切る先生さえいます。

ラオスの隅々まで出張して学校の先生がたに働きかける当会スタッフにとって、自営の図書館で日々多くの子どもたちに囲まれ、盛り立てるための様々な試行錯誤をすることは、ノウハウの蓄積とともに自信をもたらしています。

(伏元成/ラオス事務所) *ブログ:HPのスタッフ通信も参照下さい。

貸出し人気No.1、『カンパーとその妻』

美しいカンパー(孤児)が美しいナンガーを妻にしたことから村人のやっかみを買い、さらには王様がナンガーを自分のものにしようとする間、開中と次々としかけます。カンパーは薬の魔法で難を切り抜けます。さらに王様はポートレースで扱いますが死んでしまいます。それでもナンガーをあきらめ切れず、あせから蛇や蟻を送ってきます。

カンパーを主人公とする物語がラオスには様々あり、バイラン(ヤシの葉に鉄筆で書き記したもの)などにのこされています。



日本発

ランチイベント

企業内イベントのブースや社員食堂にコーナーを設けて行うランチイベント。昼食後、織物や小物を手にとったり、コーヒーを味わったりしながら、みだりな楽しみのないラオスに触れるひと時です。グッズなどの購入を通して社員のみならず国際協力できる機会として数々の企業からお声がけいただいています。

12月9日 三菱商事株式会社 “クリスマス・チャリティーバザー”



12月15日 株式会社日立製作所 “買って社会貢献！～クリスマスギフトで国際協力～”



2011年2月15日 株式会社リコー 海老名事業所テクノロジーセンター “買う&知るボランティア@海老名”



愛知発

12月2日 学校法人平山学園 清林館高等学校（津島市）

学園祭で特別企画「ラオスに図書館を」が行われ、生徒会がラオスの現状と図書館の現状を紹介し、街頭募金やバザーなどで集まったお金を寄付していただきました。当会は生徒会のみならず、使役道に相談。学校図書館の開設と絵本の出版に活用することが決まりました。

2011年3月3日 愛知県立名古屋西高等学校（名古屋市）

生徒会恒例AST（アセンブリ・タイム）行事での分科会に当会は講師を派遣。ラオスでの活動の紹介に続き、45人で24冊のラオス語絵本ができました。 「愛知県の人口より少ない人が、本州の大きさ（ラオスの産産報）に住んでいる」「ひとつの教室で2学年が一緒に授業を受けている」「小学校に駄菓子屋さんがいる」「手の上げ方（ラオスでは人差し指だけ立てて挙手）」などが印象に残ったとの感想がありました。

ラオス語絵本プロジェクト

日本の絵本に当会が用意したラオス語訳シートを貼って、ラオスに送る活動です。日本人々とラオスの子どもたちを繋ぐ絵本が生まれます。

12月12日 株式会社ラボ教育センター（東京）

英語教育を中心に多様な活動をする「ラボ・パーティ」では、カレッジメイト（大学生）が国際協力イベントを企画し、小中高大学生とチューター約20名が参加して28冊のラオス語絵本ができました。完成後にみなさんが歌った「ひとつしかない地球」が心に響きました。

参加者の感想／「みんなで作った本を早く読んでほしいです」「全然何を書いているのか分からないラオス語と接して、少しずつ内容が分かかってきて、とてもラオスと一体になった気持ちだった」



2011年2月25日 グループエム・ジャパン株式会社（東京）

「ラオス」で検索し、ヒットした当会ホームページを見て東京事務所「ラオスのプロジェクト」と申し出をいただきました。企業ビジョンの一つである Power Of One の理念のもと年に1度、毎年2月に様々な社会貢献活動を行っています。今年のテーマは「子供」、そこでラオス語の絵本作りに35名が参加し、80冊のラオス語絵本を作っていただきました。

「絵本を通じた。こういう貢献のしかたがあるとは思っていませんでした」と参加した方の声。会でもっとも多くのひと々に知らせていくことをめざしています。



講師派遣します。

当会は国際理解を広げたいことをめざし、講師派遣を実施しています。その一つ大田区の地域力応援基金助成制度「大田区とラオスをつなぐ交流事業」は2年目の採択が決まりました。今回は大田区を中心に小中高校との連携を強め、世界の国、とくにラオス・教育・子どもに焦点をあて、学校でワークショップ（参加型学習、ボランティア体験）などを行います。

世界中の子どもたちが笑顔で毎日を送れるよう、一緒に考えてみませんか。興味・関心のある方、講師派遣ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

みんなでボランティア

大学生活で、いちばん成長した1年間

加藤 香貝弥さん (2010年4月～2011年3月 インターン)

「日本の事務所って何をしているの?」という疑問から私のインターンは始まりました。「これを解決するには、実際に仕事をしないか!」そう思いました。

イベントの準備や片付け、アンケートを集計したり、ラオス産絵本プロジェクトの翻訳シートを印刷したりと、内容はほとんど幅広かったです。毎回「こういうことも日本の事務所でするんだ!」と驚きや発見ばかりでした。スポットライトを浴びるような派手な仕事ではないけれど、このような仕事こそが、現地でのよい活動をするためには欠かせないものであると感じました。

インターン活動をしなければ絶対に出会わなかったであろう方々と出会え、絶対に経験しなかったであろうことをたくさん経験させていただきました。たくさんのお礼を受け、大学生活の中で、いちばん自分が成長したと思える1年間にもなりました。



「勉強会」報告

「これだ!という国際協力の見つけ方」(12月11日 葛田区民センター)

講演者: 新井綾香さん(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)

NGOスタッフとしてラオスの農業・農村開発に携わってきた新井さん。畑作、森林の旬の恵みの採取、地域社会の営みの探採、生活用具作りなどラオスの多様な農業の営みについて、そして外からの開発に人々が向き合う姿、地域に関わるNGOとして人々の暮らしに学ぶとともに現地行政に働きかけるなどの支援をしていったことが語られました。後半は新井さんを囲んで、国際協力から人間の進路選択についてなど参加者それぞれの関心から語り合いました。

「平和ってなあに? 世界の絵本でかんがえよう!」

(2011年2月19日 地上会館&会事務所)

講演者: 田島伸二さん(国際翻訳文化センター)

NPO法人大田教育支援の会が主催し、当会が共催した平和と寛容の国際絵本展「ハロー・ティア・エネミー80作品展」で、戦争や争いを絵本ならではの寓意、ユーモアを織り込んだ作品にふれました。そして識字教育の専門家である田島さんが紛争解決や平和に向けた絵本づくりなどの実践を紹介し、絵本の持つ可能性について講演。これを受け、会の事務所などで、どのような絵本を会として出版していくのがよいか意見交換をしました。

今回の勉強会は

6/11 「山田エコノミストがラオスのなぞを解き明かす?」

講演者: 山田紀彦さん(アジア経済研究所)

表紙の写真

小学校で読み聞かせをするラオスの学生インターンのカムフくん。読んでいるのほりズムで学ぶラオス語(カムコンソム)という当会が出版した詩の本です。「都合は悪かになるけれど、貴村の人はいらなくても生活が破綻してはいない。子どもたちには、自分でいろいろなことが判断できる人間に育ってほしい。本の活動をしている会に興味をもった」とインターン参加の動機を語ってくれました。今は、スタッフとして活躍しています。

特定非営利活動法人 ラオスのこどものための、

子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。

教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 51号

2011年4月発行 編集者: 森 添

発行: Action with Lao Children / Deknolao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込 6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: deknolao@yahoo.co.jp

http://deknolao.org

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分

郵便振替00140-6-462494

2011年のスケジュール

<事務所オープン日>

初めて会に関わる方、活動に参加してみたいという方に活動の紹介をし、発通作業やパソコン入力などを手伝っていただく日です。

5/7, 6/4, 7/2, 9/3, 12/3

<勉強会>

ラオスの謎にせまったり、ラオス料理にチャレンジしたり、会の活動を振り返って学びたいという会です。

8/6, 10/8, 12/10

<活動ミーティング>

現地プロジェクトの報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営についての意見交換などを行います(運営会議の名称を改めました)。

5/14, 7/9, 11/12

(ラオスの織物展)

5月中旬に浅草のバッグと財布の専門店孔雀堂のギャラリーにて、ラオスの織物展を開催予定です。詳細が決まり次第ホームページでお知らせします。

(ラオスのお正月 ビーチバー・パーティー)

4月23日(土)、ラオスの新年の集いを東日本大震災に被災された方々への支援とともに開催します。(別紙のご案内をご覧ください)

日程は変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせいたしますのでご確認ください。みなさんのご参加お待ちしております!

メコンのほとり衣

日本の街をさっそうと! ラオスのスカート、シン

シンはラオスの伝統的なスカートです。筒状に仕立てた布を前面で折り重ねて、折り山をホックなどで留めてはくロングスカートで、無地に裾の部分(ティーンと呼びます)に紋様が織られたもの、全体が緻密な紋様で織られたものなど、織り方や色遣いは地方や民族によって多様です。フォーマルな場でももちろん、公務員の制服も、子どもたちの学校の制服もシン。仕事に、お出かけに、家でくつろぎのひとときにも、あらゆる場で愛用されています。

シンは見た目も優雅で美しく、日本の街にもすんなりとけ込みます。折り重ねがあるので動きやすく、ラオス事務所のスタッフもシンをはいてバイクに乗って、さっそうと通勤しています。ホックの位置をずらせばウエストサイズも調整できるので、とても経済的。

当会が期間限定で設けている「展示・販売スペース」(地下鉄東京メトロ東西線・本馬込駅から徒歩1分)では伝統織物やファッションアイテム、小物を揃えています。いろいろなタイプのシンを揃えていますので、ぜひご覧に、試着に来てください。



【シンの着用のしかた】
筒スカートの中に体を入れて折り山をつまみ、前面で折り重ねて、ホックで留める。